ハイドランジア アルボレスケンス‘アナベル'の摘心による抑制栽培

誌名	東北農業研究
ISSN	03886727
著者名	西村,林太郎 工藤,則子 高橋,佳孝
発行元	[東北農業試験研究協議会]
巻/号	60号
掲載ページ	p. 163-164
発行年月	2007年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council Secretariat

東北農業研究（Tohoku Agric. Res.）60, 163－164（2007）

ハイドランジア　アルボレスケンス‘アナベル’の摘心による抑制栽培

西村林太郎・工藤則子*・高橋佳孝**

（山形県農業総合研究センター農業生産技術試験場・*山形県村山総合支庁・**山形県置賜総合支庁）

Retarding Culture of *Hydrangea arborescens* ‘Annabelle’ by Pinching

Rintaroh NISHIMURA, Noriko KUDO* and Yositaka TAKAHASI**

(Department of Agro-production Science, Yamagata General Agricultural Research Center・*Murayama Branch of Yamagata Prefectural Government Office・**Okitama Branch of Yamagata Prefectural Government Office)

1　はじめに

ハイドランジア　アルボレスケンス‘アナベル’は、北アメリカ原産のユキノシタ科の低花木で、耐寒性が強く、当年枝の頂部に純白の装飾花が集合した 15～20cm の球状の花房を形成するため、積雪寒冷地向きの花木として生産が増加している。

山形県の自然条件では、1番花が6月中下旬頃から開花し、2番花はブラインド枝の発生が多いものの8月下旬頃から開花する。県内では露地栽培品目の一つとして導入が進められており、開花が安定している1番花を主体に出荷されている。しかし、1番花の出荷時期が6月中下旬～7月初旬に集中するため、収穫労力の分散と価格安定のため出荷期の拡大が望まれている。これまでに、1番花の出荷期拡大のため、3月下旬からの加温または保温により、季咲き前の5月下旬～6月上中旬に出荷できる促成栽培法を確立した[2)]。

さらに、季咲き以降の出荷期延長を目的として摘心に着目し、新梢の摘心時期が1番花の開花時期、収量、商品枝品質に及ぼす影響ならびに年次変動について、平成16～18年の3か年調査したので報告する。

2　試験方法

供試材料には、平成14年9月に挿し木を行い、同年10月に場内圃場に定植した株を用いた。

摘心について、平成16年は3年生株で4月28日、5月12日、平成17年は4年生株で4月28日、5月12日、5月26日、平成18年は5年生株で5月15日、5月29日に行い、それぞれ無摘心と比較した。摘心方法は、前年枝を地際から刈り取った後に発生伸長する新梢を所定の時期に基部2節を残して摘心した。

試験規模は、平成16、17年は1区5株、平成18年は1区3株の単区とした。収穫時の切り前は、装飾花が緑白色で完全展開前の「フレッシュグリーン」とし調査した。

3　試験結果及び考察

平成16年は、3月下旬が平年よりも暖かく推移し、萌芽は4月上旬となった。17年および18年は、3月下旬から4月上旬にかけて低温傾向で推移し、萌芽は4月中旬となった。摘心時の生育は、同じ摘心時期でも気象の年次変動により新梢長や節数に差がみられた（表1）。

3か年の1番花の収穫時期について、無摘心では6月中下旬となった。4月下旬の摘心では、遅れて地際から伸長してくる摘心されなかった新梢があるため、収穫始期に変動がみられたが、終期は7月中旬となった。5月中旬の摘心では、7月上中旬～7月末頃、5月下旬の摘心では7月中旬～8月中下旬となった。収穫期間は、無摘心では7～10日間で短期間に集中したが、摘心各区では2～6週間と長くなった（表2）。

商品枝の収量は、4月下旬と5月中旬の摘心では、無摘心と同等もしくはそれ以上となったが、5月下旬の摘心では著しく少なくなった。ブラインド枝の発生は、無摘心で少なく、摘心で多くなった。特に、5月下旬の摘心では立毛枝数のうちブラインド枝が約9割を占め、商品枝収量が激減する主因となった（図1）。このブラインド枝は、ほとんど花房が形成されず、節間がつまった葉のみの枝姿で木化し、初冬に落葉した。

階級別商品枝の割合について、3、4年生株では、摘心により80cm以上の割合が少なくなるが、5年生株では無摘心よりも多くなり、株齢による商品枝の階級分布に違いがみられた(図2)。実際のところ、80cm未満でも問題なく流通しており、この階級分布が生産上の大きな問題とはならない。また、上位階級の割合を高めるのであれば、摘心位置を下げることでボリュームが大きくなるため対応は可能と考えられる（データ省略）。

1番花商品枝（未調整）の品質は、階級別割合と同様の傾向が見られ、3、4年生株では摘心により切り枝長、切り枝重、茎径が小さくなったが、5年生株では無摘心と同等以上になり総じて商品性に問題はなかった（表3）。

花房は、出荷、流通、生花店のいずれの段階においても、大きすぎると扱いにくく、ホームユース向けではコンパクトな花房が求められている。この点において、摘心することにより花房径および花房厚とも小さくなる傾向がみられ、商品性の改善にもやや効果があった（表3）。

群馬県から、摘心前の処理は異なるが、収量等から摘心時期は4月下旬までが適し、摘心により花房がややコンパクトになるとの調査結果が示されている[1)]。摘心適期が異なる要因として、摘心後に一定温度以上の気温に遭遇するとブラインド枝が多発すると考えられ、その温度に遭遇する時期が山形県では5月下旬以降とみられる。気温と花芽分化の関係は、2番花の安定生産にも関係しており、さらに検討を要する。また、摘心により花房がコンパクトになる傾向は本報告でも同様であった。

4 まとめ

3か年の調査から、山形県では4月下旬～5月中旬までに新梢基部を2節残して摘心することにより抑制栽培が可能であり、季咲きの6月中下旬に続いて7月下旬まで収穫が延長でき、収穫期の年次変動は小さいと考えられた。商品枝の収量は無摘心と同等もしくはそれ以上で、商品性に問題はなかった。5月下旬の摘心では、ブランド枝が多発し収量が激減するため、抑制栽培には不適であった。

これまでの成果と組み合わせると、5月下旬～6月上中旬出荷の促成栽培、6月中下旬出荷の季咲きの無摘心栽培、6月下旬～7月下旬出荷の抑制栽培が確立され、出荷期を2か月以上に拡大することが可能となった（図3）。

引用文献

1) 群馬県花の総合センター．1999．平成11年度花き試験成績書:33-34.

2) 工藤則子, 高橋佳孝, 小野惠二．2006．ハイドランジア　アルボレスケンス‘アナベル’の促成開始時期と加温温度．東北農業研究59：235-236.

表1 摘心時の生育

株齢	摘心時期（月/日）	萌芽日	萌芽数（本/株）	摘心時生育 新梢長（cm）	新梢節数（節）	摘心部径（mm）
平成16年（3年生株）	4/28	4/5	13.4	16.0	5.7	5.5
	5/12	4/5	11.0	33.0	6.8	8.1
	無摘心	4/5	14.8	－	－	－
平成17年（4年生株）	4/28	4/18	31.8	9.1	2.4	4.2
	5/12	4/18	39.4	26.4	4.1	7.3
	5/26	4/18	34.6	49.3	5.5	7.2
	無摘心	4/18	44.4	－	－	－
平成18年（5年生株）	5/15	4月中旬	37.7	29.3	4.1	6.3
	5/29	4月中旬	32.7	65.4	7.2	7.8
	無摘心	4月中旬	42.0	—	—	—

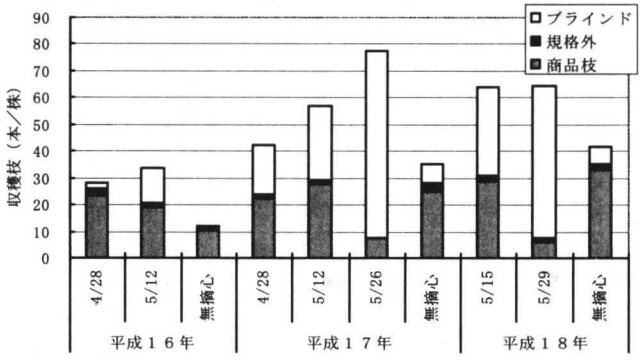

図1 摘心時期が1番花の収穫枝に及ぼす影響

表3 1番花（商品枝）の品質

株齢	摘心（月/日）	切り枝長（cm）	切り枝重（g）	茎径（mm）	節数（節）	花房径（cm）	花房厚（cm）
平成16年（3年生株）	4/28	74.7	23.7	6.0	6.4	11.4	4.6
	5/12	72.7	23.9	5.9	6.6	11.3	4.9
	無摘心	77.0	48.9	7.6	7.0	16.0	7.0
平成17年（4年生株）	4/28	65.8	41.0	6.1	4.7	9.9	3.4
	5/12	72.7	34.8	5.9	5.6	9.6	3.9
	5/26	69.3	28.0	5.1	6.1	8.5	3.1
	無摘心	86.9	54.8	7.4	6.4	10.0	4.7
平成18年（5年生株）	5/15	90.4	60.3	5.8	8.9	8.7	4.1
	5/29	84.6	55.6	5.8	10.7	9.2	4.2
	無摘心	84.5	46.8	6.0	8.5	10.7	5.4

注　調査：未調整状態で測定

表2 1番花の収穫時期

株齢	摘心時期（月/日）	収穫時期 始期[1)]（月/日）	終期[2)]（月/日）	収穫期間[3)]（日）
平成16年（3年生株）	4/28	7/7	7/20	14
	5/12	7/12	7/30	19
	無摘心	6/18	6/24	7
平成17年（4年生株）	4/28	6/24	7/15	22
	5/12	7/4	8/1	29
	5/26	7/15	8/12	29
	無摘心	6/20	6/27	8
平成18年（5年生株）	5/15	7/10	7/31	22
	5/29	7/12	8/23	43
	無摘心	6/21	6/30	10

注　1）始期：1割収穫時期
2）終期：9割収穫時期
3）収穫期間：始期～終期までの日数

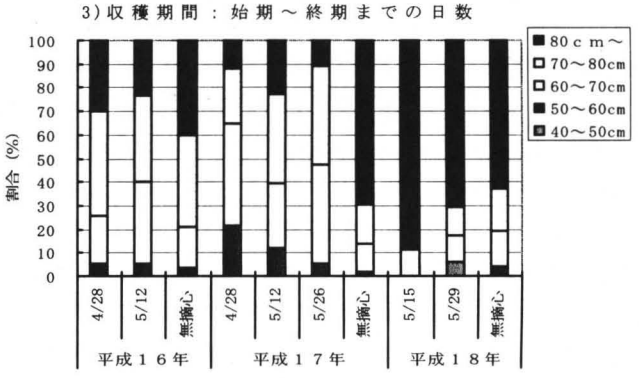

図2 摘心時期が1番花商品枝の階級別割合に及ぼす影響

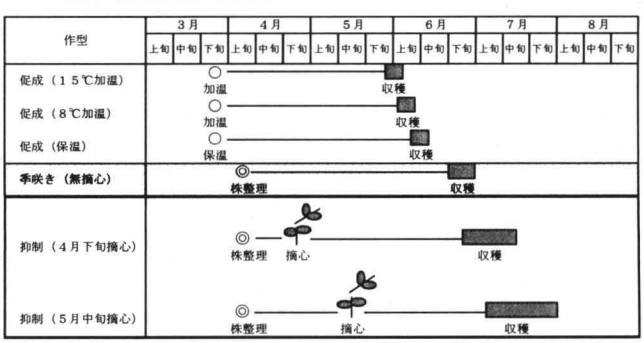

図3 栽培暦